



9月11日に実施した漢検に合格した人たちは。小4 菅原 空君 中1 菅原 悠君 中1 渡邊美羽さん 中2 八巻心花さん 中2 土井愛梨さん 中3 通岩さくらさん 高1 福原せりかさん 高2 藤井彩華さん 田積千鶴さん の9名が合格です。おめでとうございます！今回、合格できなかった人は次回頑張りましょう！



附属中2年の村上君、自発的に坊主になりました。気合！



21期生で釧路振興局に勤める小原君、差し入れ持って。



21期生で「東急ステイ札幌大通」に勤める木村さんと。



6期生で39歳の中島君、9月に起業しました。「ラックリン」というハウスクリーニングの専門店です。

何のために勉強するのか！
 全校一斉休校が解除の見通しになり、新学期は11月上旬に迎えられそうな状況だ。ただ、大学は11月下旬以降の開講になるところもある。大型連休を授業に充てる学校も出てくるだろう。
 今春の入試は終了したが、この夏以降の入試（推薦やアドミッション・オフィス型）はどうなるか、気をもんでいる関係者が多いに違いない。来春の入試も通常通り実施できるのか、新型コロナウイルスの感染状況がどのようになるかが見通せない中、混沌（こんとん）とした時間が流れている。
 試験でいえば、コロナ禍で大きな影響を受けているのが就活だ。企業を集めた就活イベントは軒並み中止に追い込まれ、インターネットを通じて会社説明を実施する企業もある。さすがに今後、すべての面接をウェブで済ませる企業が多数になるとは思えないが、それでも従来の就活作法では通じない面も多からう。様相が一変した。
 企業の業績悪化で、通常であればまさに4月から入社というタイミングで「内定取り消し」という状況も生まれている。泣くに泣けない惨事だ。企業は踏ん張って、学生を泣かせないようにしてほしい。入試にしても就活にしても、人生の大きな節目。それだけで人生が決まるわけではないが、思い描いたように動けなかったり、想定が大きく覆ったりするのはできれば避けたいところではある。
 ただ、長く生きていくと「想定外の出来事」は結構起きる。瞬時に考えて対応したり、逆に熟慮しての反応を求められたりすることも多々ある。想定しない事態にどう対応するか、逆境にどう向き合うか、いざれにしても「自ら考えて動く」ことは共通している。

山田洋次監督の国民的映画「男はつらいよ」シリーズでは、名優・渥美清さん演じる車寅次郎、フーテンの寅さんが数々の名言を吐くが、その中でも傑出して「なぜ、勉強するのか」と問われての返答。満男「伯父さん、質問してもいいか？」寅「あまり難しいことは聞くなよ」満男「大学へ行くのは何のためかな」寅「決まっているでしょう。これは勉強するためです」
 満男「じゃ、何のために勉強するのか」寅「つまり、あれだよ。ほら、人間長い間生きていろいろなことにおつかるだろう、なあ？ そんな時に俺みたいに勉強してないやつは、振ったさいころの出た目で決まるとか、その時の気分を決めるよりしようがない。ところが勉強したやつは、自分の頭できちんと筋道をたてて、こういう時はどうしたらいいかなと考えることができるんだ。だから、みんな大学へ行くんじゃないか。だろ？」
 （「男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日」）
 山田監督は、「お金をもうけるため」とか「進学校や大企業に入るため」などとは寅さんに言わせない。「自分の頭で筋道を立てて考える」ために勉強するのだ。想定外の出来事や逆境にぶつかった時こそ、それが生きる。



10/10 Bテスト対策授業



10/20 28年間使ったストーブが遂に壊れました。



差し入れやお土産たくさん頂きました。本当にありがとうございます！

いじめの認知件数は61万2496件で過去最多。特に小学校が5年前と比べて約4倍に増えた。いじめにより心身に重大な被害を負ったり、長期の欠席を余儀なくされたりした「重大事態」も、これまでで最も多い723件に上った。認知したいじめのうち、いじめ行為がなくなり、心身の苦痛がなくなって解消したと学校が判断した割合は全体の83.2%だった。
 暴力行為の発生は7万8787件、不登校の小学生は18万1272人で、いずれも過去最多。不登校の高校生は5万1000人だった。学校が把握した児童生徒の自殺は317人で、平成以降初めて300人を超えた前年度を下回ったものの、深刻な状況が続いている。
 いじめの認知件数は13年以降、最多を更新し続けている。文科省は都道府県教委などに認知を徹底するように再三求めてきており、「積極的な認知の重要性が学校現場に浸透した結果」とみる。担当者は「残念ながら、どの学校でもいじめがまったくないとは考えにくい」としており、いじめが放置されないよう、臨床心理士などの資格をもつスクールカウンセラーを学校に配置するための補助制度を拡充する。
 （鎌田悠）朝日新聞 10月22日

いじめ過去最多、22名の学校で生徒も317人が自殺
 19年度に全国の小中高校などでいじめを認知した学校は、全体の82.6%で過去最多となった。早期発見や報告を学校に求める「いじめ防止対策推進法」が施行された13年度と比べて30.8ポイント増えた。児童生徒の自殺は前年度に続き、300人を超えた。文科科学省が22日に全国調査の結果を発表した。

コロナ禍ではあるけれど、ひとつ、こんなことを考えながら自らを見つめ直すのも、良い時間の使い方かもしれない【澤圭一郎】 毎日新聞3月26日

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日
■東定期(12)	休			■鳥取定期(27)		■江南・北陽定期(27)高専(30)		休	■3年生道コン		■美原定期	■湖陵定期(20)	■富原定期(18)	■鳥取西定期(17)	休	★定期テスト前特講(9-15時)			◆学力Cテスト			休	◆学力Cテスト対策	■附属1、2年定期		文化の日 休		休	
公立高校入試まであと122日																	共通テストまであと76日												
ストップ 過保護・過干渉！																	11月の予定												

もう11月です！テストの月です！
 各校、11月は定期テストがあります。コロナウイルスの影響で、前期は落ち着かない不完全燃焼の状態であったと言いつつ間に終ってしまいました。大事な後期、テストに向けて目標を持って取り組みましょう。最近、勉強をやっているのにそれらが積み重なっていきたくないと思われ生徒が目立ちます。明らかに勉強に対しての気遣いや、やる気に欠けているように感じます。学力だけでは通用しないと言われる今は、学力も人間力も必要な大変な時代なのです。目標をもって真剣に必死に取り組みましょう。
 コロナ禍の影響で、社会は大混乱の状態です。当然、来年以降は経済の落ち着かない不完全燃焼の状況から社会に出ていく皆さんですから。

名著「どくとるマンボウ青春記」にみる「学校の役割」

中学から高校生のころ、作家の北杜夫さんの作品を好んで読んでいた。「楡家の人びと」「幽霊」など純文学の叙情的な文章が、多感な心に染みこんだ。学校の勉強に割くべき時間を北さんの本につき込んだ中高時代であった。他の場所でも書いたことがあるが、北さんの名著「どくとるマンボウ青春記」のことは書く。これは1968年に出版された名作で、ぜひ今の若い人にも読んでほしいと切に思う。なぜかというところに「学校の神髄」が詰まっていると思うからなのだ。

青春記は、北さんの10代半ばから大学卒業までを描いたユーモラスな自伝だ。中でも旧制松本高校時代の学校生活が秀逸である。世に旧制高校の素晴らしさ、面白さを広めたのは、この青春記といえるだろう。

旧制高校とは、今の高校とは全く違う存在だ。まず、小学校（6年）の上に、旧制中学校というのが5年制であり、その上に3年制の旧制高校があった。49年の学制改革で、現在の制度になり、旧制は廃止されたが、明治時代から終戦後まで、日本の教育の軸になっていた学校といえる。

旧制中学もそうだが、高校も厳しい受験競争があった。同世代の1%未満(0.2%というデータもある)しか入れない学校で、入って卒業すれば、選ばない限り旧帝国大学（東京大とか京都大などですね）に、試験はあるがまあ入学できることになっていた。なので、旧制高校は今の大学受験などの比ではなく、まさに激的な競争を乗り越えて選ばれたスーパーエリートの集団であった。

1学年200人ほどの男子校。現東京大の一高、京都大の三高といったナンバーズスクールや松本や新潟といった地名のついたネームスクールが各地に作られていた。受験時から文系と理系を分けた。授業では語学の重視など、特徴的なことはたくさんあるが、それより何より、先生と生徒の触れ合いが濃密であったことが最大の持ち味といえる。

青春記でも「旧制高校の先生のよい点は、生徒と一緒に人生を語り、親身になって相談に乗ってくれることであろう」と、北さんは書く。本では、面白くも羨ましい、その先生（旧制高では教授という呼称であった）と生徒のやり取りが描かれている。引用すると膨大な量になるのであえて引かないが、例えば北さんが学生寮の部屋で、いろりを囲んで教授2人と酒を飲み、何かの話題で意見が交錯、北さんは教授の頭をポカリと殴った、という事件が書かれている。その後、うち一人の教授（有名なドイツ文学の専門家・翻訳家）と仲良くなり、北さんの人生に大きな影響を与えることになるのだ。あるいは、定期試験の話。物理の問題が分からず、答案用紙に長い詩を書いて、合格点（60点）に1点足りない59点をもらおうといった、当時のおおらかな様子が描かれる。

もちろんそんなふざけた場面ばかりではないだろうし、落第もあって、2年連続で落第すると放校とって退学処分になってしまう厳しい学校でもあった。

旧制高校がエリート集団だったからできたのかもしれない。学力も高く、きちぎちと受験に向けた勉強をしなくてもよかったから、教師と生徒の人間関係や学校運営のおおらかさが認められたのやもしれぬ。

今、物理の試験の答案に詩を書いて点をもったら、大騒ぎになってしまうだろう。教師は懲戒処分かもしれない。酒を飲んで教師を殴れば、立派な傷害事件になって、裁判沙汰になる。

学校の役割を考える。高校までは受験突破を目指し、しっかり勉強すること。よし。大学に入れば、ちょっと息抜きしてから就職試験突破に向けて、勉強すべし。これもまあよし。しかし、**いったいどこで「人間を作る教育」を施すのか？ 教養を持った人をどう育てるのか？ 人間の幅を広げるのは学校ではないのか？**

もちろん学校だけではないが、学校が外れることはありえないと思うのだ。

青春記を読めば、本来の学校の大事な役割が見えてくる。「今の時代では不可能だ」と諦めるのではなく、良い点を取り込む学制を、新たに編み出すべきではなかろうか。私はそう思うのだ。【澤圭一郎】 毎日新聞2020年10月7日



日本の「感染者バッシング」「マスク警察」は、なぜ？

コロナ禍があまりに甚した「世間」の闇

「感染者バッシング」「自粛警察」「マスク警察」「帰省警察」……。世界で新型コロナウイルスが猛威をふるう中、なぜか特に日本社会で顕著な社会現象が相次いでいる。「コロナ禍で日本特有の『世間』が強化され、同調圧力がかつてないほど高まっている」と警鐘を鳴らすのは、「世間」評論家の佐藤直樹・九州工業大名誉教授だ。

他国にはない「犯罪加害者家族バッシング」

——コロナ禍で起きている「自粛警察」や「感染者バッシング」は、日本に特有の現象なのでしょうか。

◆ここまで深刻なのは、日本だからでしょう。海外のテレビニュースでは、感染者が普通に顔を出し、実名で「みんなも気をつけて」などとインタビューを受けているのでしょうか？ しかし、日本ではありえない。

感染者の個人情報暴露、ネット上でたたかれ、家族や通学先の学校や勤務

先にまで抗議の電話や手紙が殺到する恐れがあるからです。

コロナ禍の以前から、日本社会にはこういうところがあります。

私は犯罪加害者の家族へのバッシングの問題をずっと追いかけてきました。4月に出版した「加害者家族バッシング 世間学から考える」にも書きましたが、犯罪加害者だけではなく、その家族までたたかれ、転居や、時には自殺にまで追い込まれる、こんな異様な現象は他国では見たことがありません。

——そういえば、米国では犯罪加害者の親など家族が顔を出してテレビのインタビューを受けていますもんね。しかも「私にも信じられない」などと答えていて、謝罪に追い込まれることもない。

◆そう。視聴者の方も、「家族といえども別々の人格」と認識しているからです。**しかし日本では違う。「世間を騒がした、迷惑を掛けた」という点で「同罪」とされてしまう。だから家族までがたたかれる。**

しかし、この問題はこれまで見えなかった。日本では犯罪率が低いため、犯罪加害者家族は圧倒的な少数派だからです。ところが今回のコロナ禍は誰もが感染しうる。つまり、今回は誰もが「当事者」というわけです。

コロナ禍で高まった同調圧力

◆今回の新型コロナウイルス感染症は、無症状の感染者でも他人にうつす、という特徴があります。それゆえに、人々の不安と恐怖はかき立てられました。

その結果、元々強かった日本社会の「同調圧力」が、かつてない規模で強まり、目に見える形で噴き出した。それがコロナ禍における「自粛警察」や「感染者バッシング」の正体です。犯罪加害者家族へのバッシングと相似形です。

誰でも感染しうるのに、感染を加害・被害の文脈で考え、感染者をまるで「犯罪加害者」のように見なしているのです。

「世間に波風を立てる＝悪」

——「自粛警察」や「感染者バッシング」は、「同調圧力」によるものだと？

◆この国では多くの人が「他人（世間）に迷惑を掛けるな」と育てられ、世間に波風を立てることは悪だとすり込まれています。「法のルール」とは関係なく、「世の中に迷惑を掛けるのは一番悪いことだ」という「世間のルール」に従おうとする。

だから国や自治体の「自粛要請」に逆らう者を発見すると「世間に迷惑を掛けている」と考え、「自分が迷惑を掛けられた」と思い込む。誤った正義感に突き動かされ、通報や抗議、脅迫までしてしまうのです。

海外では、ロックダウンと罰則という「法のルール」で人々の行動を抑え込みました。それでもロックダウンに反対する大規模デモが起きました。

一方、日本ではあくまで「自粛要請」だったのにもかかわらず、「ルールを守れ」「非常時だから自粛せよ」という同調圧力によって、異論自体が封じられました。

コロナ禍で、「世間」の同調圧力と相互監視が今まで以上に強まっているのです。「世間」の正体とは？

——「世間」ですか。佐藤さんは1999年、「日本世間学会」の設立に関わられました。初代代表幹事でもある。そもそも「世間」とは何でしょうか。

◆「世間」は「日本人が集団になった時に生まれる力学・秩序」と言えます。「社会（society）」とも「共同体（community）」とも違う。1000年以上前から存在し、万葉集にも詠まれています。

欧州では、キリスト教の浸透によって神と向きあう「個人（individual）」が誕生し、個人の集合体である「社会」が成熟しました。

日本でも明治時代に「個人」や「社会」という言葉が輸入されましたが、「個人」が確立しなかったため「世間」は温存されたのです。

今でも「世間のルール」が「法のルール」以上に人々を縛っています。

——佐藤さんは刑法学者です。なぜ「世間」に注目したのですか。

◆法律学を大学で教えていましたが、ずっと気になっていました。「日本人は法律を信じていないぞ」と。そんな時、元一橋大学学長の阿部謹也さんの名著『世間』とは何か』などを読みました。古代から現代にいたるまで、日本人の生活を支配し、日本の特異性をつくってきたのは「世間」だ、と。なるほど、日本人は「法のルール」ではなく、「世間のルール」に従って生きているのだ、と納得しました。それで阿部さんと一緒に「日本世間学会」を設立したのです。（次号へ続く）



先日、焼肉店に行った時、アルバイト（多分学生）と思われる若い子がとても元気がよく、はきはきと応対してくれました。いまどき珍しいと思うほど生き生きと働いていたのです。名刺を見ると、名前の下には「気合と根性」と書いてありました。書いてある通りの仕事ぶりでした。

学力がどうかは分かりませんが、過保護、過干渉で育ち責任感や発想力ない子供たちが多い中で、こういう子たちがこれからの社会で必要とされ、通用する若者なのだろうと、ちょっとほっとし、いい気分になりました。

塾生をみると元気がなかったり、挨拶がちゃんとできなかったり、無断で塾を休んだりするような生徒が見受けられます。社会で通用する大人になるためには、自分の行動に責任を持ち、日々努力を重ねることです。人生、全ては積み重ねなのです。